

COLLEGE INFORMATION
甲子園短大通信
 甲子園短期大学 発行

甲子園学院 久米利男学院長先生が十二月十七日に卒然として黄泉の国に旅立ってゆかれました。九十九歳。六



追悼 久米利男 学院長先生

十有余年の長きあいだ学院長を務め、学院を牽引されてこられた大黒柱を失ったことは、学院をはじめ短期大学にとつても痛恨の極みです。学院長先生は、大学卒業後に徴兵され、九死に一生を得て復員されました。これは幸運というよりも命運で、生きて日本の復興に尽力せよとの天の啓示だったのかも知れません。復員後は急逝された校祖先生のとをうけて、校訓の理想とする教育に

邁進され、幼稚園から大学までの総合学園としての甲子園学院を築きあげられました。まさに学院長先生は天の啓示の負託を見事に果たされたのです。いまは校祖先生の御許で六十年余の学院発展のあとをご報告しておられるはずで、残されたわたくしたちは学院長先生のご遺志を継いで、さらなる学院・短期大学の発展に寄与してゆかなければなりません。学院長先生のご冥福を心からお祈り申しあげます。

前学長 木本 好信

〔第一部〕
 新成人の門出を、全学挙げて祝福する式であると同時に、卒業を控え社会に飛び立とうとする二回生が、自らの責任と義務を再確認する誓いの場でもあります。
 瀧上凱令学長からは、「社会人として生きていく基本、それは校訓三綱領です。社会の中で実践し、さら



に成長していかれることを期待しています」と祝辞がありました。夢に向かって飛び立つ二回生にとつて、温かい励ましのお言葉となりました。それに応えて、学生代表として幼

〔第二部〕
 落語家の桂福團治師匠をお招きし、「新成人の皆さまへ、手話と私」と題して、これまでの経験を基に、新成人へのメッセージをお話していただきました。
 声帯ポリープにより一時期声がなくなつたことがきっかけで、日本で初めての試みとして手話落語を始められています。



一月八日、学院高校講堂において、久米知子理事長・学院長先生のご臨席を賜り、「平成二十七年学度内成人式」が執り行われました。式に先立ち、お亡くなりになつた前学院長 久米利男先生のご冥福を祈り、全員で黙とうを行いました。

平成二十七年学内成人式
 ～新成人としての自覚をもつて～

児教育保育学科の山本千裕さんが、学内成人式へのお礼の言葉とともに「成人としての自覚と責任を心に留

め、自立した一人の女性として社会に貢献できるよう歩んでいきます。」と誓いの言葉を述べました。記念品として、台付袱紗が二回生全員に贈られ、生活環境学科の増田瑞穂さんが代表していただきました。

また、学生二人が舞台上上がり、手話落語の体験をさせていただきました。
 東京オリンピックが開催されるまでに、手話も視覚語として一般に普及することを信じて頑張っているなど、「自身の体験を踏まえた励ましのお言葉をいただき、笑いの中にも「福祉の心」を学ぶことができました。

学内成人式に出席して
 学生代表 山本 千裕

私は学内成人式に出席し、第一部の式典で、誓いの言葉を述べさせていただきました。その中で、特に心を込めて述べたのは、「周りの支えがあったからこそ、今こうして無事に成人を迎えることが出来た」という部分です。私は短大に入学して初めて親元を離れたので不安なことが多かったのですが、先生方や友だち、両親が支えてくれたからこそ、ここまで来られたのだと実感しています。
 第二部では、落語家の桂福團治師匠の手話落語を交えてのお話をお聞きしました。楽しいお話や心が温まるお話があり、とても感動しました。また私たちも手話落語を実際に教えていただき、友だちが壇上で披露する場面もあり、充実した時間を過ごすことが出来ました。
 学内成人式を通して、成人としての自覚を持ち、周りの人への感謝の気持ちを忘れずに日々を過ごしていきたいと強く思いました。

坐禅



教授 早坂 三郎

少年時代は文学全集を乱読していましたが、数多くの本に書かれていた坐禅の不思議な魅力に興味を持ち、小学校五年の夏休みに父に頼み、故郷仙台北にある鄙びた村の古く小さい禅寺を探して貰いました。でも、禅堂だけは立派でした。いかにも禅僧と思いき田辺峨山老師のもとの十日間の修業を自らに課しました。

禅寺の一日は朝四時半の起床と共に、直ぐに座禅を組むことから始まります。右足を左腿に、そして左足を右腿に胡坐のように座り、組んだ左足の上に右手の指の上に左手の指を重ね両手の親指を合わせて置く結跏趺坐を一時間ほど行います。目は畳半畳先を半眼に開き、鼻先と臍が畳に垂直になるように顎を引き背筋を伸ばし、一分に二回のゆっくりとした腹式呼吸で、思い浮かぶことに心を委ねるといふものでした。時折、老師が警策という棒で両肩を背後から小気味よい音と共に叩くのですが、とても痛いので気が入りませんでした。疲れたら堂内を静かに畳の目に沿って歩く経行をします。写

My Favorites



真の木版は、坐禅を始める時に叩くものです。その後は、朝食ですが万物に感謝して食すという「五観の偈」を唱える作法で、生きること食について自然に学べた思いです。片づけ後はお昼まで坐禅で、昼食後は作務と言って庭や東司の掃除などをして、また座ります。夕食後の一日の最後に、鐘を合図に五体投地の挨拶の作法もって、「独参」と称する老師との問答があり、最も緊張する時間でした。私の最初の公案は、「隻手の声を聴け」でした。片手で音が出るものかと思ひ、何が分かるかと思ひ、日が過ぎ、家に帰りたい思いだけが募り、十日間の参禅の申し出を後悔しました。参禅を終えて山を下りる時に老師はいつも、「絶対に後ろを振り返るな、わしがずっと見送っているから安心して行きなさい」と仰り、両手を大きく広げ振っていました。そこで、後ろを向かず斜め横になつて幾度も頭を下げながら帰つたものでした。
 それ以降は短い日数での参禅を十年ほど続けました。皆さんもお寺に行かずとも、坐禅をして目の上の頭の中に何が去来するか、体験してみてください。

伊勢志摩フィールドワーク研修

今年度も後期試験を終えてから、一回生全員で、伊勢志摩フィールドワーク研修に行きました。
 大型バス二台に乗り、約二時間かけて伊勢に到着し、まず始めは内宮とおかげ横丁を散策しました。続いて鳥羽水族館で、飼育員から「教養セミナー」を受けました。水族館の社会的役割や伊勢湾に多く生きている生物などについてお聞きし、学生たちは熱心にメモを取っていました。

ホテル志摩スペイン村に到着してから「バリアフリーツアーセンター講師による講習」と「テンプルマナー講習」を受けました。バリアフリーについての講習では、障がい者が行ける場所を探すのではなく、行きたいところを開拓していく取り組みについて学びました。テンプルマナー講習は、初めは少し緊張して戸惑っていましたが、スペイン料理の美味しさに緊張がほぐれてきたようでした。食事を楽しみながらマナーについてのお話に真剣に耳を傾けていました。学生たちからは、「ナプキンの扱い方やナイフとフォークの使い方を詳しく知ることができて嬉しい」との感想が聞かれました。



◆学友会新役員決まる◆

平成二十八年一月十五日に開催された学友会総会において、平成二十八年度の学友会役員が、次のように承認されました。

- 活躍を心から期待します。
- 会長 大槻 美咲 幼児教育保育学科
 - 副会長 西村 弥純 生活環境学科
 - 総務 村元真友子 生活環境学科
 - 総務 森 友紀子 幼児教育保育学科
 - 書記 足立ひなた 幼児教育保育学科
 - 会計 宮瀬 梨帆 幼児教育保育学科

甲子園短大通信 第80号
 (編集・発行) 甲子園短期大学広報委員会
 〒663 8107 西宮市林町四一五
 TEL:079-651-3000 FAX:079-651-7910
 http://www.koshien-c.ac.jp

短大・中高 合同文化祭

昨年に引き続き学院中高との合同文化祭として大学祭を開催しました。今年の短大のテーマは、いつも笑顔が絶えない学校生活をという願いを込めて、「The Koshien 2015」です。主なイベントとして、模擬店、バザー、植木市、ステージ発表などがありました。



学生食堂で行った模擬店では、焼きそばやミネストローネなどは人気が高く早くから完売し、キウウリの一本漬けなどは子どもたちに大好評でした。イネーブルガーデンの植木市は昭和六十一年から続く伝統ある催しで、園芸部員がタネから育てたビオラやナデシコ、さし木によるハーブ苗などを販売し、多くの地域の方々が参加され、朝早くから賑わいました。ステージ発表は中高の講堂で行い、大いに盛り上がりました。特に、鹿児島県奄美群島と沖縄県でお盆の時期に踊られる伝統芸能である「エイサー」は、沖永良部島出身の学生が中心となって、太鼓を持って舞台狭しと踊りを披露し、その迫力は圧巻でした。また幼児教育保育学科二回生によるミュージカル仕立ての合唱は、演技も衣装も凝っており、拍手喝采でした。

卒業研究発表会



二回生の卒業研究履修者による論文発表と作品展示が行われました。また学習成果の発表として、介護福祉専攻の学生によるケーススタディ、幼児教育保育学科「保育総合表現」履修者の合唱が行われました。

作品展示では、手作りの絵合わせサイコロや手遊び布絵本、パソコンで見る電子紙芝居などを熱心に見入っていました。幼児教育保育学科の学生がリズムカールに踊りながら歌う「ドレミのうた」ひとりぼっちの羊飼「しつとりと二部合唱で歌う「旅立ちの日」には、会場から多くの拍手が送られました。論文発表では、「子どもが表現活動を行う際の想いや影響力、大人の関わり方について」など二つの演題が発表されました。ピアノ演奏のドビュッシー作曲アラベスク第一番では、フランス音楽について研究しイメージを膨らませた情緒豊かな演奏が聴かれました。ケーススタディでは、「利用者の自尊心に配慮した声かけによる排泄」など、実習を通して学んだことが発表されました。一回生は、二回生の発表に真剣に耳を傾け、来年度に向けての意欲を高めたようでした。

点、奨励賞四点について、ステージ発表の前に紹介と表彰式があり、学生とともにその栄誉を称えました。

甲子園学院美術資料館 (久米アートミュージアム)

久米アートミュージアムにおいて十月三十一日から十一月十五日迄「奈良絵巻白描絵巻」展が開催されました。奈良絵巻では室町時代の「花鳥風月物語」、桃山時代の「鼠草子残巻」、江戸時代の「十番曲」など、絵巻物の挿絵として明るい彩色の肉筆の絵画で素朴な作風が特色です。一方、白描絵巻は墨一色を用いた筆線を主体として描く技法で、江戸時代の「離畜物語」「源氏物語」、室町時代の「稚児今物語」「下燃物語」などが展示されました。いずれも見ごたえのあるものです。また、国際日本文学研究センターや国文学研究資料館、名古屋大学など絵巻の研究者が再々、訪れ熱心に鑑賞していたのが印象的でした。

恒例の書道展開催

甲子園短期大学の師走の恒例行事である「書道展」が十二月八日から十三日まで、西宮市立北口ギャラリーで開催されました。昭和五十八年に「美術・書道展」としてスタートして以来、平成二十年から「書道展」として開催され、今年で三十三回目となります。一回生の学生にとっては授業の一環である夏休み中の錬成会の成果、さらに二回生は卒業研究の発表の場でもあります。出品点数は四十八点を数え、幅広い年

生活環境学科は今

社会の第一線で活躍されている先生や施設から、特別授業や各種フィールドワークを通じて、将来の就職現場で役立つ技術や知識を教えていただくことを重視しています。



生活環境専攻二回生は、本学の卒業生である福島元子氏(NPO法人食空間コーデイネーター協会近畿支部運営委員)より、「暮らしの行事と文化」の授業の一環としてテーブルコーデイネートや和食のマナーを教

えていただきました。箸使い、煎茶の入れ方、和菓子のいただき方など実際に行いながら、日本の文化を学ぶことができました。介護福祉専攻の一・二回生は、葬祭会館「エテルノ西宮」において看取り後の援助やお葬式のマナーについて学びました。各自が数珠や袱紗を持参し、葬儀会場の受付の作法や焼香のマナー、納棺などを体験しました。介護福祉士を目指す学生にとって、人間の尊厳や自分の死生観についても考える機会となり、貴重な体験となりました。園芸療法士の資格取得をめざす二回生は、「NPO法人たかつきデイサービスセンター」晴耕雨読舎を見学しました。NPO法人たかつき代表理事である石神洋一氏(本学非常勤講師)より、晴耕雨読舎における園芸療法および園芸福祉活動につ

代層の卒業生の作品に加え、中川攝陽先生、久米翠娥先生の協賛出品もありました。漢字および調和体の三×八尺、二×八尺、二・六×六尺、半切サイズなど、バラエティーに富んだ作品が展示され、いずれも大作・力作揃いでした。



図書館公開講座

十月三十一日に附属図書館公開講座が開催されました。今年度は東京大学大学院教授 佐藤信氏を講師に招き、「日本古代史の最前線と高校教科書」について熱のこもった講義をしていただきました。百名近くとなった聴講者は、西宮市および近隣地域在住の一般市民、日本史を学んでいる大学院生、日本史担当高校教諭など多岐にわたりました。国際的な視点から古代史を見つめ直す大切さや、今も新たな発掘調査や研究によって、日本史が大きい



幼児教育保育学科は今

保育現場で活かせる保育の基礎理論と実践に役立つ技術を身につけるため、様々な授業を行っています。



今年度は一・二回生合同で、おたのしみ会と須磨海浜水族園フィールドワークを行いました。おたのしみ会では、企画・運営すべてを学生が担当して行い、行事について実践的に学びます。一回生は、グループごとに趣向を凝らしたダンスや歌を披露しました。二回生はミュージカル「サウンド・オブ・ミュージック」を歌や振付はもちろんのこと、道具に至るまでクラスで協力して作り上げました。見事に演じきり、一回生や教員たちからは、感嘆の声が上がっていました。

須磨海浜水族園のフィールドワークでは、園児を引率することを想定して、見学のタイムスケジュールを組んで水族園を回り、お弁当を食べる場所や集合する場所の確認など引率に必要な援助法を学びました。その他、二回生の模擬保育を一回生が

く動いている現状を丁寧に説明していた。だき、質疑応答が予定時間を超過するほど盛り上がりました。アンケートに寄せられた感想からも満足していただけな様子が見えま

教育研究センター公開講座開催

今年度の第一回目は、十一月七日に「介護の質を考える-穏やかに老後を過ごすために」のテーマで、高野恵子特任准教授が介護の仕事の奥深さや魅力とともに介護福祉士がどのような教育を受けて誕生するのかについて講演しました。「介護は人格だ」と言われた高野先生の言葉が身に染みましました」とか「介護者養成に対する熱意と情熱を感じました」などの感動のコメントが寄せられました。

続いて、十二月五日には「考える仕組み」だまされたいための心理学」のテーマで瀧上凱令学長がだまされたいためには自分の認知機能の特徴をよく知り、自分は大丈夫と思いきまないこと、そして「速く」「楽に」と思っている時こそ注意が必要で、錯視図形をはじめとした様々な日常の例を挙げ、具体的に解説しました。参加者からは、「とても分かり易く、思い当たる節もあって楽しかった」「日常の行動について考えさせられました」との感想が書かれていました。どちらの研修会も三十余名の参加者でしたが、地域の一般参加の皆さんからは、介護について目から鱗が落ちる思いの知見であったこと、介護にも愛情と熱意が必要なこと、また心と脳についても詳しい質問が相次ぎ、予定の時間をオーバーするほどの熱気でした。アンケートにも今後の開催に向けた希望が寄せられていました。

キャリアアップ研修会

今年度も兵庫県の「福祉・介護従事者キャリアアップ研修事業」の補助を受けて、キャリアアップ研修会を実施しました。

第一回は「心と身体を健康に」身体表現」と題して仁木温子氏(FMCミュージカル主宰者、本学非常勤講師)を講師にお迎えして、音楽を心で感じ、身体を使って表現することについて学びました。参加者は、言葉や音のイメージを声や身体を通じて生き生きと表現していました。研修会の最後には幼稚園や保育所などのクリスマス会で活用できるように、「あわてんぼうのサンタクロース」を講師のアドバイスを受けながら各グループで振り付け、発表しました。

第二回は「心と身体を健康に」タクティルタッチ®体験」というテーマで、山本裕子氏(日本タクティルタッチ®協会会長、千里金蘭大学教授)をお迎えして、感覚療法であるタクティルタッチ®(全身を系統的に撫でる、ツボを軽く押すなど組み合わせた療法)について体験を交えて学びました。タクティルタッチ®には、疼痛の緩和・ストレスの緩和・緊張の緩和などの効果があるということでした。また、研修の最後に行われた情報交換会では、参加者同士活発に意見が交わされました。両研修とも幼児教育や介護の現場での実践に活用できる有意義な研修会となりました。